■防災について

1.　事前復興にどこまで力を入れるべきか

大規模な災害が起こる前に、発生する事態を想定し、発生後の応急対応や復旧･復興に必要な体制をあらかじめ整備･構築する平常時での取り組みのことを事前復興と呼びます。そのためには、避難を円滑にし、救助車両を走りやすくするための道路拡張や延焼を防ぐ防火帯の設置などが必要となります。これらには個人の持つ土地を安く提供してもらったり、いつ起こるかわからない災害に備えて莫大な資金が必要になったりします。それだけのことが必要な事前復興にどの程度まで力を入れればよいのでしょうか。

2.　情報保障のために何をすればよいのか

災害時に適切な行動をとるためには、正確な情報が必要です。しかし障害を持った方や高齢者には正確に情報が伝わらないこともあります。情報が得られないために避難が遅れたり、復旧で不利になったりすることがないようにしなければなりません。とはいえ、全ての情報を得ることも、伝えることも難しいため、偏った情報だけが伝えられる可能性もあります。災害時の情報を選別し、地域住民で共有することが必要になるのですが、そのためにはどのような方法があるでしょうか。

3.　安全・危険の判断は誰がするべきか

突然の災害に遭った人々は、住んでいる場所にこれ程の危険があることをなぜ教えてくれなかったのか、安全を守るのは行政の役割ではないのか、と思うことでしょう。また、土地の液状化で傾いてしまった家の持ち主は、造成した会社が安全な家を売らなかった、という思いを持ちます。自分が住む場所が、過去にどれだけの災害に見舞われたかを調べる人がいます。自分の身は自分で守る、危険の判断を自分がする、という思いです。行政、企業、自分･･･、安全・危険の判断は誰がするべきでしょうか、それは可能なのでしょうか。

4.　人口減、財政難の中で防災をどうするのか

地域の防災の重要な拠点となる消防署（常備消防と呼びます）は、人口の減少から統合され、また地方自治体の財政難から、人員が縮小されています。また住民がボランティア精神を基盤に地域の防災を担う消防団（非常備消防と呼びます）や水防団も人口の減少から、人員が不足しています。今後も人口減が進むならば、常備、非常備の防災のサービス水準が下がるかもしれません。自分たちで地域を守る消防団などを充実させ、常備消防を縮小するという考え方、逆に消防団などは不要という考え方もあります。人口も税金も少なくなる中、地域の防災をどのように進めればよいのでしょうか。

5.　大規模災害時、各自で避難することができるのか

岩手県には「津波てんでんこ」という言葉があります。津波がくれば肉親や知人のことも構わず各自で逃げなくてはならない、ということです。職場や学校で大規模な災害に遭った場合、自宅に戻らず、避難をすれば、自宅の家族はちゃんと逃げられたのか、学校が子どもをきちんと避難させてくれたのか、不安になります。不安を取り除き、住民同士、あるいはその場にいる同士で協力しながら、自らの命を自ら守るために、日ごろからどのようなことが必要になるでしょうか。

「防犯」に関するテーマ概要は裏面

■防犯について

1.　防犯カメラは必要か

あちこちで防犯カメラが設置されるようになっています。時にはそうした映像が全国ネットのテレビ番組で流されることもあります。いつの間にか、自分の姿が撮られ、誰かに見られていることがあるかもしれません。プライバシーや肖像権の侵害だけではなく、その映像がどこで誰に使用されるかわからない、という不安もあります、また防犯に役立つとされますが、犯行が撮影されても、犯人の逮捕や犯罪の立証に役立つだけで、抑止効果がないとの意見もあります。防犯カメラは本当に必要なのでしょうか。

2.　防犯コミュニティづくりには何が必要になるのか

見知らぬ人がコミュニティに入って来たときの備えとして、また何かあったら助け合うことができるようにと、近所の方の情報を共有したり、提供を受けたりすることがあります。さらに、近所同士がお互いに見守ることで安全を確保したいという動きもあります。ただ犯罪を防ぐためとはいえ、自分のプライバシーや個人情報が他人に共有され、互いを見守ることに抵抗を感じる人もいるようです。犯罪を防ぐために情報をどこまで共有すればよいのか、地域住民がどのように連帯するのが良いのか、その場合、どのような人々で集団を作ったりすることが望ましいのでしょうか。

3.　被害者を生まない地域の環境づくりは可能か

犯罪に巻き込まれたり、犯罪被害者を生み出したりしないまちの構造はどのようなものでしょうか。街灯が少ないため不安を感じる学生が多いことが聞き取りで明らかになりました。こうした安全のための設備の他にも、公園の木を伐採して死角を減らすこと、犯罪者が逃げづらいような道路の整備など建物や実際の環境を整備すること。さらに、信用できる限られた人しか入ることのできないコミュニティ（ゲーテッドコミュニティ）を造ることなどで被害者を減らすことが可能でしょうか。

4.　割れ窓理論に基づく地域の防犯対策は有効か

割れ窓理論は、建物の割れた窓を放置するとその地域に誰も関心がない、とのサインとなり、やがて軽犯罪から重大な犯罪に発展するという理論です。軽微な犯罪を見逃さずに取り締まることの重要性を指摘したとされます。ニューヨークなどはこの理論に基づく対策で犯罪発生率を減少させる効果があったといわれますが、落書きや器物破損など、小さなことも見逃さずしっかりと指摘をして、犯罪の芽を摘むことが本当に地域の防犯に役立つものでしょうか。

5.　罪を犯さなくてもよい社会を地域から作ることができないか

犯罪は、不景気など社会が不安定になったりすると起こりやすくなりますが、生活にゆとりがなく「お金がほしくて、つい…」とか、子育てに疲れ「イライラしていて、つい子どもに…」など個々人の事情や心理もあります。そうした状況に陥らないように、個人が何らかの形で社会に関わり、社会の一員としての自覚を持つことができれば、犯罪に走らなくてもすむかもしれません。罪を犯さなくてもよい社会を考えたとき、例えば人を孤立にさせない、悩みを打ち明けることのできるような方がたくさんいる、など地域での活動から作ることが可能でしょうか。

「防災」に関するテーマ概要は裏面